

妙見山みょうけんやまのちかい  
―岩崎弥太郎いわさきやたらう―

一八三四年、土佐とさ（今の高知県こうちけん）に生まれた岩崎弥太郎は、まけん気が強く、勉強熱心べんきょうねっしんな若者わかものでした。弥太郎は、よく、近くの妙見山のぼに登り、目の前に広がる太平洋たいへいようを見つめて、

「海は大きいのう。もっと勉強して、この海のおここの世界せかいを相手あいてに仕事しごとをしたいのう。」  
と、ゆめをえがいていました。

弥太郎が二十一才のころのことです。弥太郎に、江戸えど（今の東京都と）で勉強をするチャンスがやってきました。しかし、弥太郎の家のくらしは、たいへん苦くるしく、弥太郎が江戸で勉強するためのお金はありません。

「こんなくらしの中で、ゆめをもっても……、どうせ無理むりじゃ。」

弥太郎は、これまでがんばっていた勉強を、しだいになまけるようになりました。そんな弥太郎に、母は、

「近ちかごろのおまえは、どうした。勉強をなまけては、いかん。」

と、声をかけました。

「勉強したってむだじゃ。わしの思いは分かってもらえん。わしのゆめは……。」

弥太郎は、そうさげふと妙見山の頂上ちやうじやうまでかけ登り、海をじつとにらみつけるのでした。

そんなある日のことです。母は、弥太郎をよび、つつみをさし出しながらしずかに言いました。

「弥太郎、これをもって行きや（行きなさい）。」

「これは何じゃ。」

「山を売ったお金じゃ。このお金で江戸へ行って勉強してきいや

（きなさい）。」

母は、父と相談そうだんして、家のたった一つのざいさんである山を売っ

て、お金をつくったと言っています。

「そんなことをしたら、これからのくらしがこまるろう（こまる  
だろう）。どうしてそんなことを……。」



「弥太郎……、子のねがいを大事だいじに思わん親は、おらんきね（いませんよ）」。

弥太郎の目には、なみだがうかび、ぬぐってもぬぐってもあふれてくるのでした。

江戸に旅立たびつ前の日、弥太郎は、妙見山の頂上に立ちました。

目の前に広がる海に、父と母の顔がうかんできます。

「わしの心には、この海より大きい父と母の思いがある。その思いにこたえたいんじや。わしは、ゆめをかなえるまで、この山には登らん。」

そうちかいを立てた弥太郎の目に、その日の海は、いちだんと大きくうつるのでした。



その後の弥太郎には、苦しい出来事できごともたくさんありました。江戸での勉強も、江戸へ行った次つぎの年には、大けがをした父を助たすけるためにあきらめなくてはなりませんでした。

それでも、どんなときも妙見山でのちかいをわすれなかった弥太郎は、いろいろな所<sup>ところ</sup>で出会った人たちから商売<sup>しょうばい</sup>の仕方<sup>しかた</sup>や外国のことを学びました。

そして、やがて、国内だけでなく外国も相手に仕事をする海運<sup>かいうん</sup>会社をつくり、「東洋<sup>とうよう</sup>一の海運王」とよばれるほどになりました。

父と母の思いを心にきざんで立てたあの日のちかいは、弥太郎が海を見つめてえがいたゆめをかなえる大きな力となったのです。



岩崎弥太郎（国立国会図書館蔵）